



【世界人間模様】イタリア中部フォーリーニョの歴史的な館で踊る小野千枝子（左）と宮廷舞踊グループ「ベルレグアルド」のメンバー。衣装はルネサンス時代の文献から忠実に再現した＝2008年3月（ベルレグアルド提供、共同）

イタリア中部の古都アッシジ。愛と平和を説き清貧の生涯を貫いた聖フランシスコの生誕地として今も巡礼者が絶えない。山腹には城壁に囲まれた中世の街並みが残り、その麓に聖フランシスコが1226年に息を引き取ったとされるサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会がある。教会から程遠くない小学校の多目的スペースで、小野千枝子の声が響く。

「リベレンツァ（はい、お辞儀して）」

大きな木製の管楽器ボンバルダと、体の前で縦に持って弾く古い形の弦楽器ビオラが奏でる15世紀イタリア・ルネサンス期の曲に合わせて、10人の子供たちが優雅にステップを踏む。

■敬意と感謝

踊りが終わるたびに「男の子は女の子に右手を差し出して」と声を掛ける。子供たちは左膝を着いてお辞儀をし、相手に敬意と感謝を示す。

「どれだけ足が上がるかとか、どれだけ高くジャンプできるかなんて関係ないの。心の柔軟性を重んじたのが宮廷舞踊だったんだから」と小野は語る。子供たちに覚えてもらいたいのは、まず礼儀作法なのだ。

元気が良すぎる子供には、練習の合間に当時の貴族の肖像画を見せる。「こんな髪形に宝石をつけて踊っていたのよ。大げさな動きをしたら髪が乱れちゃうでしょ」

練習を終えた3年生のミレツァは「1年間やっているけど難しくないし、楽しい」とほほ笑む。ボンバルダ奏者のブラディミーロ・バニェッティ（39）は「このような形で子供たちに宮廷舞踊を教えているのは、彼女が世界でただ1人ではないか」と言う。

小野は年1回開かれるアッシジ市主催のイタリア宮廷舞踊の一般向けコースでも講師を務めて、ことしで15年目になる。

愛知県知多市で生まれ、大学ではルネサンス期のイタリア哲学を学び、1970年代半ばに20代で仕事の関係でローマに住み始めた。私生活については多くを語らないが、「ルネサンス期の古楽が好きで、これに合わせてどんなダンスを踊っていたのか」に強く引かれていた。

■メッセージ

アッシジに移り住んだ小野は、国内外の図書館や古文書館を訪ね、理論や振り付けを説明した舞踊論の原典12部の写しを苦労して入手した。しかし、筆記体で書かれた資料は読みにくく、理解には膨大な時間がかかった。古いイタリア語字体の研究者ローザ・マリア・ゼノービ（62）の助力で内容を確認した。

「音楽や舞踊の知識だけでは不十分」なので、宮廷の歴史や社会背景など芸術を支えた哲学にも造詣を深めた。

例えば、15世紀半ばの舞踊教師グリエルモ・エブレオ・ダペーサロが仕えていた貴族に奉じた「舞踊読本」の序文には「国家を広げるためにいつも戦いに明け暮れていらっしゃるご様子。ときには貴婦人の手を取り、舞踊をお楽しみください」とある。小野はこれを「人々を戦争へ駆り立てないための平和のメッセージ」と読み解く。

理論の研究と並行して3人の舞踊研究家に師事、93年に宮廷舞踊集団「ベルレグアルド」を仲間と結成した。伝統を守るため、由緒正しい場所でしか踊らず、伴奏は生演奏だけと決めて、数年に1回のペースで内外の城や宮殿、美術館などで公演活動を行ってきた。

ダマスコ織りや金襴（きんらん）の素材を使った、当時のきらびやかな衣装も再現したが、衣装は公演のとき以外には身に着けない。

日本人がイタリア人に宮廷舞踊を教えることについて、ゼノービは「ルネサンス文化がイタリアだけのものではなく、世界の宝だということを示している」と評価する。

小野は「子供たちがお年寄りや弱者に手を差し伸べることができるよう、舞踊を通して『平和の原点』とも言える敬意や感謝の心を学んでほしい。15世紀の精神は今も生きている」と話す。

「世界の聖地、平和の地アッジでやるから理にかなっている。男の子が戦争に駆り出されないこと、相手への配慮が培われることを願っている」。異国の地に暮らす小野の熱い思いだ。

□□□

《動く芸術作品 仏に渡りバレエに発展》

14～16世紀のイタリアのルネサンス芸術というとレオナルド・ダビンチやミケランジェロに代表される絵画や彫刻、建築などが思い浮かぶが、1400年代に盛んだった宮廷舞踊もその中で重要な位置を占めていた。

当時の文化の母胎となっていた宮廷では、結婚式などの祝賀の席で、イタリア各地に群雄割拠していた諸侯が威厳を示すために自らも参加して舞踊を披露した。それらの宮廷舞踊が後にフランスに伝わり、現在知られるバレエに発展したとされる。

ビデオなどの録画装置がある現代と違って、当時の舞踊は披露された瞬間に消え去る運命にあり、現代に再現するためには数少ない資料を丹念に研究する必要があった。

宮廷舞踊に関する15世紀の文書としては、諸侯に仕えたドメニコ・ダピアチェンツァ（別名ダフェッラーラ）、グリエルモ・エブレオ・ダペーサロら舞踊教師が残した理論と実践の書が知られる。舞踊音楽のほとんどもこれら舞踊教師の作とされる。イタリアをはじめ世界各地の古文書館や図書館には、これらの写本が残っている。

同時代最高の絵画や彫刻で装飾された部屋で、金欄の見事な衣装に身を包み、典雅な身のこなしで披露された宮廷舞踊。それは、小野千枝子の言う「まさに『動く芸術作品』」だったのだろう。（敬称略、共同／SANKEI EXPRESS）



【世界人間模様】子供たちにお辞儀の仕方を教える小野千枝子（左端）。「現代にも役立つ立ち居振る舞いを、楽しく学んでほしい」と願っている＝イタリア・アッジ（共同）記事「[イタリア 宮廷舞踊で伝える「平和の原点」](#)」